藩鑑

百二十九

立花

内閣文庫
和書
三四六八二號
二八〇冊
一五九函
一ー二架

内閣文庫		
番號	和 34682	
册數	278 (129)	
函號	159	1

藩鑑巻之二百二十七目録

外部十二

立花伯耆守源鑑連

藩鑑巻之二百二十七

立花

伯耆守源鑑連ハ大友左近将監能直の後裔戸次常陸助親家の嫡子なり童名ハ八幡丸と唱へ後ニ左近将監または丹後守とも稱し剃髪して道雪と號せらし初め氏ハ戸次なりしか筑前國立花山の城

築く居住せしより立花ともて家號と
せり天文元年十七歳にしてはしめて
戦場に赴く夫より中國は毛利元就と敵
し九州にては島津義久及ひ菊地龍造寺
等の居城にをしよせ合戦に及ふ事凡
二十七度遂に一度も敗北せる事なし
天正十二年筑紫廣門龍造寺隆信
等と戦ふと挑んて筑後國高良に張陣

此時に病悩頻に發して陣中に空しく
なりぬ是九月十一日にして歳も七十餘
なり

一 豊後國南郡藤北の鎧岳の城主は戸次
伯耆守鑑連入道道雪なり元来大友の
類葉にて親秀か次男戸次左近將監親秀
か末孫なり累代武勇をあらはしける
中にも道雪は大友家に肩をならふる者も

なきのみか隣國にしまて類ひなき士大将は
く智謀驍捷兼備し堅きを碎き鋭きを破り
奇正應変の道にあつく攻取戦勝の功ありけれ
かそふる事なくしハ跡九國に嶄然として
名を西州に瑩然としてありける道雪長夏
炎熱の堪かたくさます河朔の避暑をとなせ
へしとて書院の大庭なる木陰に席を設
け荷葉の盃をめくらし微酔して枕
に倚居られけるに岩間に咽ふ遣水の音
そふるをりに軒の風さしく吹落して梢の
蟬の聲ならてハ更に夏しもいさしらて
樹陰に小屾を按せし明皇の遊ひ小窓に高
臥しつる陶潛か樂しみも此にハまさらしと
てまさき秋の風そ身にしむなと詠しつゝ
ありける折に俄に空かきくもり黒雲白雨を
帶て恰も三千丈の瀑布の水を巻て来

しるか如くに當る亦を透りぬへく降りて
雷霆しきりに轟き雷火忽ち落下しつゝ
庭中と奔逆せし道雪ハ早業の達者なれハ
側に立てありける千鳥といへる刀を取て飛
掛り雷と覚しきものを抜打に丁と切て飛
さりける所ハ何かハ不明なからすゑこたへし
て見えけるか刀ハ雷に當りたる驗のありける
にそ實ニ雷を切りたりとそ知られけるそれ

よりして先刀を雷切と改名せされしも道雪
も雷の爲め偏に中られて身体こそかたはに損
せられしかとも王者に成しまにならさるに依
て出軍のときも駕籠に乗てそ軍士をハ
下知せられける背より鬼神龍蛇を切し例
ハありといへとも雷火を切し事ハ支那日本
に類ひありともいまた聞ハしらす 陰徳太平記

一 大永六丙戌年豊前國西之城主大内義

隆にかゝらハ彼佐野間田を大将として五千余
人馬嶽の城に楯籠り合戦の用意なり
此よし肯佐の神主より大友義鎮の許へ
飛脚を以て注進せし義鎮大に怒りいそぎ
退治せへしと鑑連の父戸次親家に討手の
大将として命せらるゝ折節親家病悩甚し
く出陣なりかたかりしかハいかゝ行ふへきと
一族家老の面々評議しける所に鑑連進
ミ出て某の名代に発向仕らハ何ことあり候まし
親家是をきゝて嬉しく床に病の枕をもたけ
汝幼年の身にして勇健なる事と申すもの
なる哉天晴戸次の家を興せへき器なり汝か望
ニ任せへし既に初陣の事なれハ駈引に付て
老功の者の申せを肯に従ふへし今度の合戦に
於いて勝利疑ひなしと悦ハれける則ち
武功の老士両三人を侍大将として鑑連に附

名代と成て軍列閑雅に調へ都合を勢二
千餘騎時日を移さすして出せし時に鑑連
十四歳なりしかとも軍立ひとさかハすくれて
勇気にほこれ旗ひけるに糸緋威の鎧に水色の
總角結ひさけ白星の冑に八相の前指物
重代の太刀を帯し戸次黒といへる太く逞
しき馬に金紋打したる鞍を置せ身軽
けにゆらりと乗り馬蹄静にうたせける

城近くなりけれハ鯨波を一聲あけける程
こそあれ息もつかせす攻寄せる城中
にハ敵今日よもやと寄来るへしとハおもひ
寄さりけるにや軍勢以の外に周章し
く前後左右に度をうしなひしかハ鑑連真先に
進んて金の麾を振立不意を討る此時より
かゝりやつくれしとも知れしハ二千餘人の兵
しも皆こゝより攻登る城兵もこらへすと破られて

ここ五十餘人々取敢ず駈合て防ぎたれとも或
ハ冑をかりて戴き鎧を著ず又ハ鎧ハ著
れとも小手をと指ず大半素肌なりけれハ
なじかハ防ぐへき立足もなく切散され二の丸
さしてひきしりぞく寄手つゞいて二の
郭に込入る此ゟ城卒五百餘人々ひしく
とゝ物具して二の丸城門を開かせ喚き叫んで
て切て出る戸次勢事ともせずまくり立ま

くり立火花を散して戦ひける大将いよく
士卒をはげまし夜をとゆるませ責なされ
進めやものども時こそよけれと大音揚て
呼ハれハ軍卒挑む氣色なく即時に二の
丸をも攻破り詰の城へぞ追込ける所ハやゝ只今
落城せるかと見る處に大将佐伯弾正親基
間田豐前守重安辯士を出し さまく降參
被致と乞けれハ則ち合戦を止め此旨を豐

後義鎮の許へ脚力をもて伺ひける返答あり
二人の大将は外國士の質子を質に取を存
團を解くへしとあり命の如く人質を請て
人数をひき籠城の者ともを返しぬ此城にて
戸次氏族の名ある武士を籠をとき勇名に勇
人して凱陣せし鑑連か此度の働たくましき隣國
他國までも恐怖へいまた幼稚の身にして
初ての合戦にゆゝしき攻やり城に智謀

勇略無双の生質なり行末は天下の雄将
あるへしと感称せぬはなかりけり　戸次軍談

一　立花道雪　もとハ戸次といふ立花の跡を嗣しゆへ立花と称せしもとハ名ハ鑑連と称せ　若
かりしとき雷に撃れ足痿歩行公に任せ
せ常に手輿に乗れり累代大友家に属せ
大友家衰へけれとも道雪ハ心を変せさりし武
勇逞しき人にて士卒を見る事子を愛
せるか如し戦に臨むときハ二尺七寸なり

けるかど種々鳴り物を手輿に入れ二尺
ありける棒に腕貫をしてこれに提げ弁ら
れ長さ刀さしたる士百余人手輿の左右に
相具し軍はじまれハ手輿をば士にかゝせ
棒をとりて手輿をたゝきゑいとうと聲
かけ此輿を敵の真中に舁入よとて拍子を
とり進む時ハ輿の前後をたゝかれけるに敵
ににけるまゝも加へして両方からせ押

入りけれハ手輿の左右の士二尺余りの刀を
抜つれて一文字に切て掛りけるに先陣の者
共もはや例の音すると云ひもあへず吾
先にと競ひ掛りいりみだる堅陣とも切崩されし
といふ事なり　若先陣進みかねしときハ
道雪大音かけ我を敵の中へ舁入よと命ず
くハ其後迄よく眼を見出し下知せられ
不とくにやまり返して勝さる事なかりしかれハ

道雪の士ハ一月よ幾度となく合せつると
いふ者多し　まこと道雪常に士よ弱き者
ハなき者なり　若弱き者あらハそれの悪
しきにハあらしの其大将の励まさゝるの罪
なり吾士ハいふまても及ふハ下部よ至るまても
度ゝ功名なきハあらしの他の家にゆくとも其士
あらハ吾方に来りて仕へよとやうひて逸
物にせん吾士の四月朔日（わくぬき）左之衛ハ若き時

もしめての軍にとくれし事のあらし
にいつのころよりか血くさき事にたつ
よひて次第よ勤よ馴れ今ハ五六人の剛の
者に世よいもてそうしとそたまく武功
なき人あれハあき塞りのあるを運なり
武功の事に弱らしさうハ吾見定めて
明日にも軍に出んに人よそうのうされ候
臣を捨りけしく討死し給ふなそれハ不忠

なり身を全くして道雪をたすけて給ハ
れ各とうらつきしかれハこそかく年老しも
身は敵の真中に入りくひろみしたるを見
せさるそいと懇に語しく云て酒盃かハし
其こころをやりけるか武具を取おろして与へける
れけれハ気を励まされて重く軍功ありし
とき必しも人に後れしと勇みて御武
者ぶりの能見ゆれハ咲ひ出しておれ人々

見けれハ此道雪の見し如くに遠ふへきにあら
ましとく勝れたる剛の者の名を得て殊に
不思に能引出してよといひて又人々にもかと
合せられし事此道雪の天の冥加にかなふ
ひしる事よく勇め立もし若き士の常
ことなく油断やまちたる事のあらし
ときハ容赦なく叱しらる笑ひ道雪
ハ士ハふつつかにてあらされハ軍に臨み

て火花を散し以後ハ武人ともこそ勇ましく
く後を追ひける真似して登らむとしけるハ
人々感し涙を流し武人の為に命を捨し
ともかけるなり　常山紀談 太田記

一 大友義鎮二万余人の勢を豊前に差遣ハ
さる其大将にハ戸次丹後守鑑連斎藤兵部
少輔鎮實吉弘左近大夫鑑理此外田原
臼杵をはしめ各豊前へ発せむかふ規矩郡
立石原にて手合をして戸次丹後守ハ足
達山表西より廻りて柳ヶ浦に至て出す
斎藤吉弘ハ鬼躑躅野に於て大友の軍
ありしまゝハ山を続く門司の方へ打かゝると
此相図なり天文廿二年十月十二日巳刻
より軍をしまりて天地を響し責戦
ふ中にも戸次丹後守ハ大友の大将なれハ
手勢引具して矢毎に射進せ以後戸次丹後

なると書付て散々に之を射させけれハ中國
勢後までも今度の軍をは仕やりたと見て
戸次と云ハ名字にても恐ろしとそ申あへし

一

九州治乱記
九州記

永禄四年十月戸次伯耆守鑑連臼杵等一万
五千餘騎毛利勢に對し先手をとそ定ける
けり先陣ハ臼杵越中守二陣ハ田原親賢其
次ハ安藤重實其次ハ吉弘左近大夫其跡ハ

戸次道雪ハ五隊に分させて諸卒に下知して
曰く合戦をしましきさるならハ諸軍ある云陣
事あれ冑を傾けとりて来らハ鯨波を
揚て戦ふへし敵一の手へかからハ二の手と次
く横へとりて二の手へかからハ一の先又横合よ
り戦ふへし之四の備も其に同しかるへしもし
先手敗軍せハ戸次の備胴勢として押返し
く戦ふへし其時脇の備ハ進ミ出て敵の左

右を撃へし一手切に合戦を始めハ一手切に
戦ふへし他を救ふとて備を乱すへからすと
軍令を定め山下近く来る道雪を
慕て其の勢に歩武者八百人を與へて弓
を持せ矢を射かけさせけれハ戸次伯耆守か来るを以
て書せまする長道具持せたる歩武者馬武
者と組合せて先に立ち鬨や聲を出して
折てかくり既に太刀打に及んとするとき

八百張の弓を揃へ徒武者を撰て射落せ

弦徒之年也

一 永禄八年比立花但馬守鑑載毛利元就
に従ひ加勢を受け大友宗麟に背きしかハ
宗麟大に怒りて戸次丹後守鑑連入道道
雪に討手の大将を命し急に是を誅伐
せしむ道雪選兵を引率し立花城へ押
寄せ透る所なく揉に揉て攻戦ハ鑑載ハ

頼切たる士大将に深須図書といへる勇励
の者ありしが由布美作守惟信と組て討
れけれハ城兵殆とうせきりぬ終に城を
攻落され鑑載父子ハ何地へともなく落行
れて浪々ただよふ浮萍のよるべもなき
身となりぬ是によりて立花の家跡絶し志
をしくつく者多かりけり　戸次軍談

一　永禄八年五月中旬大友宗麟ハ丹生嶋を発
足せられ相従ふ侍卒にハ先本陣の士大将
に戸次紀伊守鑑連入道道雪其外臼杵親
度同親賢臼杵鑑速等都合其勢二万之
手勢騎立花の城下へと取廻し同十七日より
仕寄を付楼をあけて先遠攻にそ志たり
けり翌日十八日道雪ハ大手の陣より諸士同
と飛りて攻よせ城中へと破入し
と踏く而に道雪先登し軍士もまさ

つゐに攻入けるゆへに遂に二の丸を攻落
けれハ臼杵新次も一同に乗入りて先日當
城を落されつる恥をそ雪きける 月ミ

一 鑑連ハ戸次氏なるを立花氏に改め給ひしそ
れを尋るに第七代但馬守鑑載ハ大友の
末葉にて大友義鎮入道宗麟に對して
逆意あるへき道理なしといへとも宗麟の
晩年にいたりて悪逆無道におはしませ
ハ諫ことなく永禄八年に謀叛せしる宗麟
忠を損んしけるに大軍を出し立花の城
を攻る事甚急なりけれ 依て鑑載ふせく
力なくして七月十八日自殺して城ハ落さ
り其時宗麟より鶴原掃部助田北民部
を此城の主番としてそ同十二年毛利元就
大友を凌し吉川元春小早川隆景両大将
を以て此城を攻る鶴原田北ハ小勢を以て

此大兵を防きかたく扱になりて下城し
豊後に帰りけれハ吉川小早川より坂新
五左衛門桂能登守浦兵部丞を城代に入置く
十月十五日吉川小早川勢をひきあけ両國
しりそき宗麟ハ中國勢を事ゆへなく引
せしむる事を口惜くおもひ臼杵越中守
鑑速吉弘左近大夫鑑理戸次丹後守鑑連
此三大将を差向て此城を攻しめ給へり

毛利の城代此大軍をふせくにちからなく
降参して城を明渡しけれとも戸次鑑連
を城代として宗像氏貞其外毛利家よ
一味の城々を押へられ宗像大宮司氏貞
ハ鑑連の名将に勢を取しまれんことをさけ
て大友と和睦せられハ其外の小城ハいふ
に及ハすみな大友に降りけり依て大友より
戸次鑑連に此城を賜ハり糟屋郡にて之

子笠町と領し宗像鞍手両郡よ行く
ゆへ小給人多く手鑑連の与力となさしめ那珂
河早良怡土志摩九郡ハ小城を留立
花の支城として元亀元年に豊後
國南郡藤北鑑蔵の城を避て此立花
よ入城し立花鑑載をも子左近将監親吉
此系譜を纏て立花と改姓あり立花丹
後守鑑連入道道雪といふ是なり　立安斎聞記

一　御當家戸次の御名字立花よ御替なされ候
道雪様御望を以ての儀と是ゆる儀を読人
存しくる事にはいかやうの首尾にて御望
成されはやたしかなる儀存は者是なくは
由布美作此雪斎存生のとき申しては鑑
後御討取なされ以後立花山に御在陣なさ
されへくと契しめさまは不は脇より立花
立城の処是非ゆく道雪様にハ御立城

成さら候ともかくも御討取の地之鑑
使ハ公方御一族の中にても大身といひ家柄
といひ公方御兄弟にても鑑使よりハ下の格
式なれハ以来諸方の敵と踏附ることにたい
てハ府内にての格式立花の家にせこうも
御労り成さるまじく立花御至城と御望なさ
さるへしにて御頼なされ候へともさうへ中
着見有り候ゆへ公儀より御免許なく候ハ

至城の儀ハ再三成らるべくおほしめされ候
つらハ御名字と立花に御改なさるへくと仰
儀極ハされ候ハ立花と戸次ハ豊後の格式も
つひ見有るゆへ立花より御成なされ候ゆへ以後
鑑使至世の格式のやうに相勤らるべき儀
公儀より御免見なくとも幸てさやうは
想たせらるへしとの儀にて御儀成され候ハ公
二度まで公儀より御合点なされ候との御返

事ゆへ此度月に多年御忠節みな〳〵無據
成候とも其不足御望相なり候ハ、是非なく
思召定めらるへく旨是迄りしと御段被成へ相
聞え立花の名字ハ被成に不忠の名跡ゆへ
御免ならされ候て能く〳〵も是迄ての願ふる
上ハ御望ニ任せらるゝとの事なりき是
張孫総左ハなされ御免になりかの一世の御名
兼なされ候処を憚り切而しめされ統虎様

御代に立花の御名乗なさるへき旨御望あり
なひ候事に戸次右近大夫に立花を御許し
成されへきとの段になく則ち右近大夫立花
と名乗り道雪様は他界の一年前より統
虎様ハ立花と御名のり是ハされ候段ハ其
後も覧居申候ましに道雪様御立城の段
ハ筑前国中の立候よりつきに始覚しなる人立城
成しく存置と止申につき基所より道雪

相入此る所望之趣申之毛利家押へ
に差被置候御老功の儀に付而道雪相同
様成さるへきとの儀にて御立城其ハさし付

公程開帳雑書

一 永禄十年七月肥前国龍造寺山城守隆信
並形大友を叛き大身なれハ他家にたよら
ず一族を従へて大勢を催し筑後へ出る
とゝ沙汰有之ハ戸次伯耆守吉思之行入道宗
麟被召四人を遣ハされ龍造寺へ申さしよ
せ隆信ら矢取て此旨量なれハ見切をとく
し城戸を開きつと出て先備を追ちへせ
戸次伯耆守横合より入り肥前勢を追返し筒
口を揃へ打けれハ又龍造寺を将退跡ハ柵
を結ひ柵の内へ入救とくり入矢軍に日
を送る

龍造寺記
大友記

一 秋月長門守種實勢ひ強勢になり殊更中

国立公文書館
National Archives of Japan

一 国の味方とまねきよせ實満の後詰を致させけるにも宰府に出陣しけれハ戸次鑑連臼杵鑑速吉弘鑑理評議ありて之将合て二万余騎を引率し秋月の城へ発向せしかハ永禄十年八月十四日の巳の刻より軍始り井水長谷山にて一日の中に七箇度まて鑓合ありしに戸次鑑連七度なから太刀打して能武者多く討取しつ

戸次軍談
九州治乱記

一 此日夕陽に成けれハ秋月勢邑城にひきこもりて明十五日の早天より寄手邑城にをしよせる例の鑑連諸軍に先立味方と下知し真先に進まれけれハ其の者ともも勇をなし討るるまて乗越進んて終に秋月の邑城を乗りやぶる

九州治乱記

一　秋月種實永禄十年九月二日一万二千余の
勢を四手にわけ二本をハ不ゐ本陣と
居へ次第に軍勢を操出し鑑連か体松
か陣へそうしかけゝり鑑連ハ斥候の告
早速に是を注進しけれハ鑑連則ち二
千余騎を従へ吉光に出張し先鋒ハ小野
和泉由布大炊五百余騎中軍ハ戸次右
近大夫鎮連六百余騎後軍ハ鑑連自ら

五百余騎段隊ハ円田そ波多播安藝守二百
余騎さて吉光を体松ゆるよハ虚旗を數
十流を建へとさゝり秋月ハ中軍綾部駿
河守五千余騎鎮連ゝ備を取包て討んと
せ鎮連勢を左右にわ之方より寄合せ
馬か鼻を虎頭に揃へて馳之れハ秋月勢
多くハ歩立にて其猛勇に突崩されえの
陣へそひきにける

戸次軍談

一
九月二日の夜秋月勢城を掃て打ていくに庄
山の寺ゟに夜討を掛り大軍引色になりける所
に志りも不意の夜討なれハ寺ゟ汲の外に大
崩しく千ゟ小勢に引もどり楠山を打廻り
長着ハまでつゝきしも多かりけり戸次鑑連休
松の陣にも味方崩掛りけれハ鑑連足とつしも
騒かをしその者を勇め追来しる敵を待請て
自身も散々に相戦ひ夜軍の事なれハ敵

味方ふ明ならさ臼杵吉弘も一戦よ利を
失ひ筑後路さして引のけり豊後國の住人
利光左庫助も秋月勢を討捕夜明けれハ
戸次鑑連ハ味方の負を助け落来る敗
軍の士卒を集めて勢をそろへ引勝て
結句取てかへし無二無三よ切て掛らせしも
勝ほこりたる敵を山際まて追返し諸軍を
あやまらし引取せて後自身も志つかにと人次

末にひつきしを天晴勇将やと誉さゞるはなし

九州治乱記
九州記

一 戸次丹後守鑑連ハ豊後藤北の城主にて
智勇あり忠にして豪傑の武士なりき先祖ハ
大友家と同しく左近将監能直より出たり
能直の嫡孫左庫頭頼泰の舎弟左衛尉
重秀より十四代の後裔常陸介親家の
子なり曽て重秀戸次の庄を賜りて城

を築き居住せし故に後々戸次を以て氏とす
せり然るに立花の家を継しいされハ立花
鑑載叛逆の節道雪宗麟の命をうけて
一挙に是を攻潰し落城の後宗麟立花
山に城代を籠置しに近国の悪徒等毛
利家を語らひ数度の取合ありける処に
永禄十一年の秋筑前華房の合戦に大友
家大いに討勝て毛利勢も敗北せしより九

州や、静謐なりしかハ宗麟つゐにおもむ
けれハ立花氏ハ大友の同流立花山ハ至要害
の堅城なりしハ鑑載にそ不義の謀叛を企
て家を亡せし者なれとも立花の氏をとい
くハ断絶せへきにかゝし道雪を武勇と
いひ殊に老功 此時道雪五十七歳 其上戸次ハ大友の親
族なれハ旁以て其機に當れり向後立花の
氏を継中國の押へたるへしと宗麟乃

差圖に依て元亀元年疫小の城をハ猶子
右近大夫鎮連に譲りて立花の城に移り
氏を立花と改しかハ断絶の家督を継き
筑前なる護職となりて國中を成敗せ
政令理に當りて奸曲の作業なけれハ國
民みな安堵の思ひをなし城主給人も礼を
盡し神官寺僧も其德を仰き他方の工
商も悉く馳集り城外日を逐て繁昌

し悦ハさらハあかりきけり

戸次軍談

藩鑑巻之二百二十八目録

た部十四

立花伯耆守源鑑連